



寺紋
ひいらぎ おもだか
格 かこみ 沢瀉
おもだか
(通称 大関沢瀉)

大雄寺報

= 第9号 =

平成22年1月1日発行

発行所 黒羽山 大雄寺

〒324-0233

栃木県大田原市黒羽田町450

TEL 0287-54-0332

FAX 0287-54-0330

編集発行人: 住職 倉澤良裕

印刷所: タキザワ印刷

栃木県文化財指定 大雄寺「総門・庫裡」保存修理 かや葺き替え完成



大雄寺総門



大雄寺庫裡



栃木県指定有形文化財 「総門・庫裡」保存修理

平成二十一年度文化財保存修理事業は、栃木県より平成二十一年六月十一日付で補助金の交付決定を受け、大田原市より平成二十一年六月二十二日付で補助金交付が決定された。

大雄寺檀信徒、並びに参拝者による浄財の「伽藍保存基金」から、この度の「総門、庫裡」の保存修理事業を平成二十一年七月一日より着手した。

平成二十一年七月二十四日入札、落札業者は宮城県石巻市北上町 有限会社熊谷産業で、同年七月三十一日契約。工期は、同年八月三日から十二月十五日と決定。

総門、庫裡保存修理事業の経過報告は、次の通りである。

総門

8月24日 工事開始

8月27日 解体作業

8月29日 蒼き方開始

9月18日 箱棟塗装、刈込

平成21年10月1日 総門 完成

10月1日 足場外し



足場設置



足場搬入



解体作業



解体作業



蒼き方作業



蒼き方作業



刈込



箱棟塗装



箱棟造作



箱棟新造



足場解体



足場撤去

9月12日

箱棟新造

10月1日

足場外し

庫裡



作業台設置



足場設置



10月17日
足場組み



足場設置

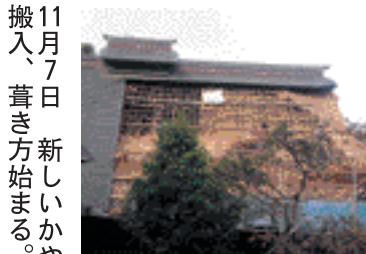
9月29日
足場組み搬入



葺き方作業



かや搬入



搬入11月7日
葺き方始まる。
新しいかやを



解体

11月3日
解体



葺き方作業



葺き方作業



葺き方作業



葺き方作業

11月8日～11月18日
葺き方



取り付け11月30日
部分の工事
銅板とかやの

板金作業



11月23日
棟先の葺き方



葺き方作業



宮城県熊谷産業かや葺き職人



刈り込み作業



完成（東側から望む）



完成（境内から望む）

12月1日
庫裡完成

大雄寺伽藍保存のための浄財勧募趣意書

大雄寺の草創は、今から六百年前、応永二年（一四〇四）余瀬白旗城内に創建されたが、戦乱の中、大雄寺焼失、その後文安五年（一四四八）黒羽藩主第十代大関忠清との争いで第十三代大関増次敗死、大関家の後継第十四代高増（大田原資清の子）により、天正四年（一五七六）に本拠黒羽城を余瀬白旗城から移築し、大雄寺も現在の地に移築した。

現在の大雄寺は、文安五年（一四四八）の伽藍で保存され、黒羽藩主大関氏の菩提寺として庇護のもと、大関家の歴代藩主並びにその親族の葬儀ならびに法要を実施することを本務として、あわせて大関家中（黒羽藩士）を檀家とし、幕末に至るまで寺の運営がなされてきた。

しかし、明治維新によって従来の藩体制が消滅したことにより、大雄寺は大関家の庇護のもとを離れることとなり、従来の檀家に加え、旧黒羽藩士以外にも、明治以降廃寺となつた末寺（長泉寺や正法寺や長溪寺や長松院など）の檀家を多数受け入れるなどして存続をはかつてきた。しかし、明治廢藩後の維持困難から檀家の代表による伽藍維持のための協議がもたれ、その方策として、伽藍の縮小、宝物の売却、寄付金の募集が提案され、検討に検討を重ねた結果、檀家による寄付金をもつて維持することを決定した。その後も伽藍の取壊しなど規模の縮小や宝物の売却をすることなく、禅宗寺院の特徴をよく残す貴重な文化財

として、昭和四四年に栃木県有形文化財として指定を受けることとなり、昭和四五年から約二十五年間にわたり、本堂、禅堂、庫裡、総門、廻廊、鐘楼、経蔵などの解体または半解体による保存修理事業を文化財補助事業として実施してきた。その後、茅屋根の破損状況が著しいことから、平成元年庫裡半解体保存修理、平成七年禅堂、総門、廻廊屋根茅葺き替え工事、平成一年本堂屋根茅葺き替え工事が行われ現在に至っている。

茅葺き屋根の耐久年数は周囲の環境や鳥類の被害により違いはあるが、約二十年と考えられている。

ご先祖が守り通した総茅葺き屋根の大雄寺を大切な文化遺産として、わたしたちの子や孫、子孫へと永く伝えなければなりません。

本年度は、保存修理から二十年を超えた庫裡、破損の著しい総門の茅葺き替え保存修理を実施せざるを得ない状況であり、また、廻廊、鐘楼の茅葺き替えも計画しなければなりません。

文化財保存として栃木県並びに大田原市の文化財補助事業のもとで実施できるよう要望してまいりますが、檀信徒の皆さんに特段のご協力をいただきなければなりません。

伽藍保存に深いご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

平成二十一年六月吉日

合掌

魅力のかやぶき屋根一新

大田原・大雄寺 20年ぶりふき替え



「下野新聞 平成二十一年八月二十八日付より」

【大雄寺】
大雄寺は「お寺の運営費を減らすために、各檀家の協力が必要」といふのが常識ですが、それを「お寺の運営費を減らすために、檀家がお寺に来て、お寺の運営費を減らす」と語っていました。

『禅・ZEN』

曹洞宗開祖 道元禅師の生涯を映画化 大雄寺を永平寺と見立てロケ

曹洞宗の開祖道元の生涯を描く映画「禅・ZEN」のロケが行われました。大雄寺を当時の永平寺に見立て、さまざまなシーンが撮影されました。

撮影は平成20年2月に雪の永平寺として大雄寺の雪景色が撮影され、4月7日・8日の両日、本堂、回廊、境内、山道、ラカンの丘などが撮影されました。

昨年、平成21年1月10日から全国各地で上映され、海外でも上映されました。

出演者：道元・中村勘太郎、懷奘・源公暁・村上淳、寂円・ティ龍進、ほか
修行僧：栃木県曹洞宗青年会18名

映画「禅・ZEN」は、只今DVD化されご家庭でもご覧になれます。



ラカンの丘「源公暁と道元の出会い」



本堂廊下「作務（雑巾掛け）」



境内、回廊「作務（掃き掃除と雑巾掛け）」



本堂内「上堂（倉澤住職が出演する（左側の奥、懷奘禪師の前）」



本堂「雪の永平寺」



回廊から坐禅堂へ「道元示寂前永平寺2世を懷奘に託し、おりんの得度を約束する。（月明かりのシーン）」

あらすじ

道元は8歳で母・伊子（高橋恵子）を亡くす。それから16年後、24歳の道元（中村勘太郎）は仏道の正師を求めて宋へ渡るが、この国でも仏教は腐敗していた。失意の彼の前に、青年僧・寂円（ティ龍進）が現れる。寂円の案内で、道元は入宋したときに錫を止めた天竜山に帰る。そこで住職・如淨禅師と出会い、如淨の元で修行を積む。そしてある夏の夜明け、道元は悟りを得る。道元は帰国し、建仁寺に身を寄せ『普勸坐禅儀』の執筆を始める。腐敗した僧たちからは孤立するが、俊了（高良健吾）、懷奘（村上淳）、宋からやってきた寂円など、道元に共感する者も集まってくる。しかし宗派を否定する道元の教えは、比叡山から邪教の烙印を押される。鎌倉幕府の六波羅探題・波多野義重（勝村政信）は、叡山の僧兵・公仁（菅田俊）らに圧迫される道元を救い、洛外深草の安養院に移らせる。遊女・おりん（内田有紀）は怠惰な夫の松蔵（哀川翔）と乳飲み子を抱え、希望のない日々を過ごしていた。しかし道元と出会い、心の変化を感じる。さらに乳飲み子を失い自暴自棄になるが、道元の教えに救われる。深草に建てた興聖寺が僧兵によって襲撃される。道元は義重の勧めで越前志此庄に移り、大仏寺（のちの永平寺）を建てる。そこで、おりんが道元の門下に入る。義重が永平寺を訪れ、時の執権・北条時頼（藤原竜也）が毎夜怨靈に苦しめられているので救ってほしいと訴える。道元は寂円と共に鎌倉へ行き、時頼に只管打坐を教える。雪深い冬の永平寺で、道元は54年の生涯を終える。

第十回 大雄寺ぼたん演奏会

平成二十一年五月十日

『魂をその一打に乗せて、解き放つ』
である。

大倉さんが、「鼓は『叩く』ではなく
く、『打つ』という言葉を使います。

が開催された。

前日まで降り続いた雨も
上がり、まばゆいばかりの
日差しが萱葺き屋根の雨露
にキラキラと降り注ぐ静か
な朝。花びらが散ってしま
うかと懸念されたボタンの
花々は、雨に洗われ更に美
しさを増したかのようで、
色とりどりに優雅な姿をた
たえている。

午前中に行われた鼓ワーキングショップには、親子五十人余が参加。本堂前の廊下にずらりと並んだ鼓を参加者が一同に打つ風景はまさに圧巻で、まだ三歳頃かと思われる幼児も、きちんと正座をし指導者の声に真剣に耳を傾ける姿には感心しきりだった。

まるで数百年前にタイムスリップをしてしまったかのような感覚にも陥り、時を越え甦った幽玄の美にすっかり魅了されてしまった。

観客の方々も満足なさっていた様子
かのように、ボタンの咲き誇る境内を
静かに眺め続ける風景がそこかしこに
見られたのは、公演をお手伝いさせて
いただいたスタッフの一員としてうれ
しくもあり、印象的でもあった。



魂をその一打に乗せて、 解き放つ

雄禪会 高木由美子
参道に白いシャガの花が咲き誇る五
月十日、重要無形文化財総合認定保持
者でもある大倉正之助さん（大鼓）と
松田弘之さん（笛）、そして伊藤嘉章
さん（舞）を迎えて、第十回大雄寺ボタ
ン演奏会『日本の調べと舞（能楽より）』

が開催された。

前日まで降り続いた雨も
上がり、まばゆいばかりの
日差しが萱葺き屋根の雨露
にキラキラと降り注ぐ静か
な朝。花びらが散ってしま
うかと懸念されたボタンの
花々は、雨に洗われ更に美
しさを増したかのようで、
色とりどりに優雅な姿をた
たえている。

「親子で楽しむ能楽講座」大鼓と小鼓の体験



大雄寺てらスクール

平成二十一年八月二日

今の子どもたち、どんな遊びを

しているのだろう…?

目面 靖浩

恒例の夏の一日「てらスクール」を、縁あって将棋の講師をお願いできるということで、坐禅と将棋という組み合わせで企画しました。

禪と勝負事である将棋。昨年に続いてどういう関連があるのか、ご住職と相談していたのですがどうもなかなかつながりが見えません。雄禪会のメンバーで相談してみたものの、これといった結論がでません。事前の打ち合わせということで大田原で将棋教室を開かれている西岡先生にお寺まで来て頂き、最近の子どもたちの様子について話していました。今の子供たちはコンピュータゲームばかりをしていて、人と接することがない。当然ながら世代間の共通する話題もない。将棋のようなゲームであれば、子供とおじいちゃんが話をしながらできる遊びなんだということを聞き、失われている世代間のコミュニケーションを図るという意義があることを見出しました。

「てらスクール」当日、今年の夏は雨が続いていましたが、なんとか止んでくれました。

参加者が本堂に集まり始めました。今年で四回目の「てらスクール」。何人かは二度め三度めという参加者がいます。嬉しいります。禪に親しんで

もらえる人が増えてきましたのです。

最初に例年通り、坐禅の仕方と本日のスケジュールについてご住職から説明がありました。今年の参加者には小さい子がいないので四十分の坐禅を行います。座り慣れてきている子もいるのか、動かすに綺麗に座っています。坐

禪も初めてであれば警策に意識が向き、ついつい緊張している空気が禅堂を漂いますが、なんとも落ち着いています。その後の作務では毎日の雨続きで夏の湿気がまとわりつ中、雑巾がけ、境内と山道の掃除に没頭していました。

そして、中食。ご住職の指導の下、全員正座をして、音を立てないように食事を頂きます。これも行儀よく食べていました。話をしないで黙々とただひたすらに食べるということに徹する。毎日の食事時間とは違う、ちょっと緊

張している顔が見られるものの、おいしそうに頂いている様子でした。

少しばかり休憩をとり、月光館で将棋教室の始まりです。

西岡先生は将棋の歴史から始めてくれました。インド生まれの将棋を日本に持ち込んだのもお寺の和尚さん。将棋の駒のデザインも塔婆の先端を切って使い始めたのではないかという説も

あり、お寺と将棋の関係が深いことを知ることができました。全く将棋が初めてという人はいないものの、歴史まで知っている人もいないようで先生の話を熱心に聞いていました。初期の将棋は駒の数も今のものとは違っていて多かったこと、そして打ち変えることができないルールであったことを説明されました。続いて、駒を並べ、駒の使い方の説明をじっくり聞きます。そして平安将棋というルールで親子で対局を行いました。将棋というゲームの

拝観も終り、本堂に戻って西岡先生から、将棋でいろいろな人と遊んでもいいとのお話があり、参加賞と受講証の授与をご住職から受けました。最後に全員で、境内まで響き渡る朗々とした声で般若心経を唱えて「てらスクール」が終了しました。

ゲーム機やテレビに囲まれ、一人遊びが多く、会話することもない現代の子どもたち、これからも「てらスクール」で得た経験で人と触れ合う機会を作ってくれたならと願っています。

奥深さと楽しみ方、そして礼儀を参加された人たち、それぞれが知ることができます。

将棋教室が終わって、大雄寺の拝観です。ご住職が年に一度しか開けるとのない経蔵に入ることができ、一切経を回す機会に恵まれました。集古館では大閑家の歴史と文献を見ることができました。

夏の思い出 寺の一日

大田原・大雄寺てらスクール

親子で座禅と将棋教室



西岡先生による説明

坐禅研修会

平成二十一年十一月十五日

坐禅研修会に参加して

高木 亮

十一月十五日、幸い好転に恵まれ、約三十名の参加（雄禪会十四名）による坐禅研修会を迎えることができた。朝、般若心經の読経、方丈様の坐禅の説明から始まり、ほどよい緊張の中で坐禅が二炷、いつもの参禅会とは一味違う坐禅となつた。参禅者がいつも単まで使つての坐禅だつた。そのためか終了前の警策が忙しそうに感じたのは私だけだつただろうか。

その後、作務に取り組むことになつたが、一般参加者の方たちが一生懸命取り組んでくださったおかげで本堂、禪堂、回廊は思ったより早く終了することができた。境内のお掃除に取り組んだ人たちも掃いても掃きつくせぬ落ち葉と格闘しながら集中したひと時を過ごしていくようでした。

その後、石川光学老師をお迎えして、昼食をはさんでの講話となつた。映画「禪」の話や、周辺の自然の話から、茗荷の話となり、あつという間に老師の話に引き込まれ、時間のたつのも忘れてしまうすばらしいひと時となりました。

老師の話は、身近な話題から仏法の核心に迫るわかりやすいお話で、ソフトにそして丁寧にお話くださったのがとても印象的でした。難解で知られる



「正法眼藏」の「現成公案」の巻きや、禪の古典である「徒容録」の内容をひきながら、それでいて私たちでも理解できるよう、噛んで含めるように丁寧に説明されていたことがとてもありがたく思われました。以前、苦労して正法眼藏を読んで、少しも理解できなかつたことを思い出すと、正しい師につく大切さを実感させられました。

私にとってはじめての坐禅研修会でしたが、すばらしい参加者や老師のお言葉の一つ一つが忘れられない一日となりました。

私たちの施設は那須塩原市にあり、現在三十九名の利用者の方が市内はもとより大田原市、那須町などから送迎や自主通勤で通つてきております。利用されている方の障害はおもに知的障害が多いのですが、皆さん、毎日パンを作つたり、下請け作業を行つたり、さまざまな作業を行つて、その作業での工賃を月一回お給料としてお支払いしております。

普段行つている仕事につきまして詳しく説明しますと、パンの製造販売について、注文やお届の出張販売をメインで行つており、休日などには道の駅やイオンスーパーセンター、また地元のお祭りなどでも販売をさせていただいております。施設の敷地内には販売所があり、利用者の方がお店の当番を行いながら接客の対応などを学んでおります。

下請け作業では、ブレーカー用バネをパレットと呼ばれる入れ物に並べる作業やパソコン部品の納品シートを折る作業、旅館で使われるはんてんの埃取り作業などを行つておりますが、不

初めまして。私たちは「セルプくろいそ」といいまして、障害者の方が通所し作業を行うことを支援している施設です。

縁あって、今年（平成二十一年）の七月より大雄寺様の墓地清掃作業をさせていただいております。

私たちの施設は那須塩原市にあり、現在三十九名の利用者の方が市内はもとより大田原市、那須町などから送迎や自主通勤で通つてきております。利

用されている方の障害はおもに知的障害が多いのですが、皆さん、毎日パンを作つたり、下請け作業を行つたり、さまざまな作業を行つて、その作業での工賃を月一回お給料としてお支払いしております。

基本は利用者三名職員一名で伺つております。一般の方やシルバー人材のような方と比べると仕事の仕上がり具合は不十分で大変ご迷惑をおかけしておりますが、色々な意味で勉強もさせてもらっております。

利用者にとって、施設の外で行う作業はとても貴重な体験であり、緊張もしますし今後就職に向けて活動を行う者にとってはまたとない機会ともなります。

また、施設としましても地域に根ざした活動として、利用者と共に行つていける作業であり、とても意義のあるものだと考えております。

仕事も人間的にもまだまだ半人前ですが、今後もご住職のご協力を仰ぎながら、利用者と共に作業を通じて成長していければと思います。これからもうろしくお願ひいたします。

景気のさなか受注の数が減つてきており施設内での作業が少なくなつてしましました。

そこで施設外での作業も行おうと、アルミ缶や古紙などのリサイクル品回収や畑作業なども取り入れるようになります。そしてこの施設外作業の一環で、今回大雄寺様の墓地清掃作業を是非させていただければとお話しをしております。

質問箱

Q 法事はどうしてやるのですか。また、祥月命日より遅れてはならないということを聞いたことがありますか。なぜですか。

A 法事は報恩感謝の行事です。

人生は駆伝に似ていますね。苦しそうに顔をゆがめながらハアハアいいながら走ってきた選手が、次の選手にタスキを渡したときのホッとした顔はとてもいいですね。タスキを受け取った選手は「よし、こんどは自分にまかせとけ」という顔してタッタッタッと飛び出します。じつは、私たちみんな人生という駆伝マラソンをしているんですね。タスキは生命、わたしの生命は私だけのものでなく、ずっと昔から伝えられてきた生命。この生命を伝えて来て下さった方々が親であり祖父母であり、ご先祖様であります。法事というのは、私たちにまで生命を伝えてくださったご先祖様に「ありがとう」と言い、「私たちも生命というタスキをしっかりとかけて、これから的人生を力いっぱい走り抜いて、次の人にしっかりとタスキを渡します」と誓うための行事でもあります。

法事は、お葬式と違い悲しむということが薄らぎます。故人を偲び、想い出話しをしたり、久しぶりに会つた親戚の子供たちが大きくなつたりするなどいたせつな時間を過ごすこともできます。

ご先祖への尊敬、家族の大事さ、親戚との親密感といったものが育まれるのもご法事です。

故人の亡くなつた月日（命日）と同じ月日のことを祥月命日といい、亡くなつた日の翌年の祥月命日を一周忌といい、二年目の同じ日に三回忌となります。

一年目の命日は終わつたという意味で一周忌といい、それ以降は「迎える」ということから、二年目を「迎える」として一を足して三回忌、六年目を「迎える」として一を足すことで七回忌となります。祥月命日を「迎える」ということから法事は遅れてはならぬと考へられています。

A 多くの日本人にとって仏壇は、位牌と共にご先祖様や亡くなつた親族をお祀りし、対話をするためのものでしょう。仏壇の本来の意味は、文字通り、仏像や仏具を飾り、仏様を祀る台のことです。

家庭の仏壇は、寺院にある仏壇（内陣）を小型にして、厨子と一体化して箱型にしたもので、ですから、仏壇は家の中のお寺のような存在です。

亡くなられて戒を受けられた名前（戒名）がお位牌として仏壇に祀られ、毎朝お香を焚き、浄水やご飯を供え、生きて居ますがごとく、お世話をす

ご本尊様を中心にお位牌やお花などを供えることで写真は必要ないと解釈されたのかかもしれません。しかし、必要ないといつても置いてはいけないと

言うことではありません。大切な方の思いである写真はお飾りして差し支えありません。

置かれる場所については、仏壇の手前の方に飾られるのが宜しいと思います。たとえば、一番手前（下の方）の段で、真ん中の位置でなく右か左に寄せた方が良いと思います。

「眼閉じ　み名呼べば　さやかにいます　我が前に」
『心静めてお名前をお呼びすると、はつきりとお姿を見るともできるし、お話しもできる』私たちの心の中に生きています。

A 多くの日本人にとって仏壇は、位

牌と共にご先祖様や亡くなつた親族をお祀りし、対話をするためのもので、色には何か意味があるのですか。
A それは「仏旗」（ぶつき）といいます。

佛教徒が仏教を開かれたお釈迦さまの教えを守り、仏の道を歩んでいく時の大いなる旗印となるものです。「仏旗」は世界各国で掲げられていましたが、一九五〇年に開かれた世界佛教徒会議で正式に採択されました。

「仏旗」は青、黄、赤、白、樺で構成されています。

①青は、仏さまの髪の毛の色で、心乱さず力強く生き抜く力を表します。

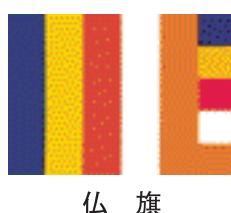
②黄は、さん然と輝く仏さまの身体で、豊かな姿で搖るぎない性質を表します。

③赤は、仏さまの情熱ほとばしる血液の色で、大いなる慈悲の心で人々を救済することが止まる事のないはたらきを表します。

④白は、仏さまの説法される歯の色を表し、清純な心で悪業や煩惱の苦みを清める清浄を表します。

⑤樺は、仏さまの聖なる身体を包む袈裟（けさ）の色で、いかなる迫害、誘惑によく耐えて怒らぬことを表します。インドやタイ、日本の僧侶もこの色の袈裟を身につけています。

涅槃会（二月十五日）、灌仏会「花祭り」（四月八日）、成道会（十二月八日）などお寺にお詣りされると、仏旗が山門や本堂に掲げられていますので、注意して見て下さい。



Q 最近「喪（喪中）」について考えていました。「喪に服す」とは、どのような思いで過ごせばいいのでしょうか。
A 具体的に何をすれば良いのでしょうか。喪中とは、身内に不幸があった場合、残された家族が喪に服す期間のことをいいますが、「喪に服する」ということは、死別が悲しいことなので嬉しい事をしている場合ではないという

心情的な理由から、ある一定期間を自宅に引きこもり哀悼の意と情をあらわして謹慎することあります。

「喪中」の喪を「喪（そう）」と読んで、木の葉がみな散り落ちてしまつた状態「別れて離れる」という意味があり、失う（喪失）という意味が用いられます。「喪（も）」と読んで、故人の親近者がその死を悲しんで一定の期間、故人の冥福を祈る礼としての意味となります。

喪中を「忌」と「服」に分けることができます。

「忌」は、故人のための祈りに専念する期間。今日では外部との接触を完全に絶つことはできませんが、仕事や学業を休む期間として「忌引」がありますが、この考え方で、「忌」の期間は死者との縁故関係によって異なり、一般的には最長で五十日間（親、子、配偶者の場合）とされています。「忌中」は、七七日（四十九日）までとされています。

「服」は、故人への哀悼の気持ちを表す期間で、最長で一年（親、子、配偶者の場合）です。この期間は慶事への参加、慶事を執り行うことを控えます。年賀状、正月飾り、新年会、初詣や結婚式、派手なレジャーなども控えます。

Q 昔から古い家には、ご先祖様の遺影が何枚も飾られているのを見かけます。

家が狭くて並べられない場合は、何枚

もの遺影はどうにして保管したら良いのでしょうか。

A 法事などの法要を自宅や寺の本堂で行われるとき、位牌や遺影を飾りご供養されます。

普段は仏間（座敷など）に飾られていますが、新盆の時やご法事のときは必ずして精霊棚や祭壇に飾ります。

ご先祖の遺影が何枚もあるが、家が狭くて並べて飾れないなどという事情から次のような方法が考えられると思います。

●額からはずして遺影を折らないでファイルに收め大切に保存する。

●遺影を縮小して小さな額に收め仏壇の近くに飾る。

大切に保管する方法を考えみてください。

Q 先日、長年飼っていたペットが死んでしまいました。近所のお寺でペットを火葬にしてくれる施設をつくったという広告が出ていたので、お願いして火葬にしました。

今、骨はお仏壇の横に置いていますが、ペットといえども家族のように過ごしてきたので、できれば家のお墓に入れたいと思います。

このことを友人に話したところ、人間と動物と一緒にするのは変だと言わされました。やはり、お墓にペットの骨をいっしょに入れるのはいけないのでしょうか。

家族の一員として大切に育て一緒に生きてきたこの子。その亡骸を目前に

してどうすればよいのか？この子の亡骸はどう埋葬してあげるのがよいのか？悲しみで一杯の中、最後にこの子に出来ることは・・・

A ペットが亡くなつた際、昔から供養は行わっていたようです。屋敷の敷地内に土葬をするのが通常であります。最近ではペット霊園の整備同じように法事や埋葬を望む人が増えています。最近ではペット霊園の整備が行われるようになり、飼い主と同じ墓に入れる（納骨室は区切つてある）霊園も登場しているようです。

土葬やまたは火葬にした遺骨を私有地である庭へ埋葬するという行為は問題はありません。ただし、土に還る過程で深い穴を掘つて埋めるなど近隣への配慮等は必要となります。

ご先祖（人間）が祀られる墓地への納骨は、その墓地を管理しています墓地管理者（寺院墓地の場合はその寺の住職）に相談をして確認し了解を得る必要があります。納骨堂（カローラ）に一緒に納めるか、納骨堂でなく墓地の片隅に納めるかなどいろいろ方法が考えられます。

人間には墓地埋葬法という法律があり墓地に遺骨を埋めるように取り決められています。しかし、ペットにはそのような法律はありませんので飼い主であるあなたが考えて、どのように葬るかを決めていかなければなりません。悲しみに暮れながらもしっかりとペットの最期を決めてあげる責任を忘れてください。

Q 友人のお身内が亡くなられたときのお通夜の席で、どのような声をかけた方がいいですか？

A 通夜や葬儀にお伺いしたとき、遺族にお悔やみの言葉や挨拶をしますが、長く話す必要はありません。失礼になりますので手短に心をこめてお悔やみを述べることです。

①『このたびは突然のことでの大変お氣の毒でございました。』

②『このたびはご愁傷様でございます。いろいろと大変だろうと思いますが、どうぞお力をおとさずに、お気持ちをしっかりお持ちになつて下さい。』

③『このたびはご愁傷様でございます。落ち着かれた頃に改めて出直して参りますので、私にお手伝いできることがあれば何でもおっしゃってください。』

葬儀や通夜の席では、不吉な意味を連想させる言葉（忌み言葉）は、使用しないのがマナーです。死や病気が繰り返すことにはないよう、縁起を重んじます。

忌み言葉の例として、『重ね重ね』『たびたび』『またまた』『しばしば』『再三』『重ねて』『続いて』など「繰り返される」ことを意味する言葉は使わないようにすることがマナーです。

はなりませんね。

あなたも一緒に坐りませんか。坐禅は、心静かに身を正し、呼吸を調えひたすら坐ること。苦しいものでも辛いものでもありません。しかし、なかなか一人では続けられないものです。

大雄寺プチ修行

《朝の修行》

午前 6 時15分	上 山
6 時30分	暁天（朝の坐禅） 禅堂
7 時	朝課（朝のお勤め・回向之証授与） 本堂
8 時	作務（堂内外の清掃） 本堂・禅堂
9 時	下 山

《夕刻の修行》

午後 2 時45分	上 山
3 時	作務（堂内の清掃）
3 時30分	夜坐（坐禅） 禅堂
4 時30分	晩課（夕刻のお勤め・回向之証授与） 本堂
4 時55分	大梵鐘八声
5 時15分	下 山

● このプチ修行を希望される方は事前にお申し込みください。

なお、「三心庵」を利用してプチ修行に臨むことができます。「三心庵」は、修行者のための施設です。

大雄寺日曜坐禅会

毎月第2・第4日曜日開催

※初心者はプチ修行の体験が必要です。

午前 7 時30分	坐禅 禅堂
8 時15分	作務 本堂・禅堂
8 時30分	茶話会
9 時	下山

「三心庵」とは、修行施設として備えたゲストハウスです。

曹洞宗開祖道元禅師の典座教訓から喜心、老心、大心の三心から命名しました。

三心とは、

喜心とは、仏さまとそのみ教えと行する人を尊び、巡り会えた因縁を感謝し、他人の利益に供する 喜びをもって勉める 喜悦の心をいいます。

老心とは、父母が切々と子を思い、我が身の寒さや熱さをうち忘れ、子のすこやかなことを願いながら 慈しみ育てるような親切な心をいいます。

大心とは、たとえば大山や大海のように高く、広い思いをもち、一方に片寄ったり固執せず 差別することのない 平等で大きな心をいいます。

平成22年の行事

1月1日より	初 謁	10月1日	大施食会
2月3日	節分会	12月18日	観音祈願法会
3月13日	白旗不動尊大祭	12月31日	除夜法会
3月18日～24日	春彼岸会		
5月1日より	牡丹開花	毎月第2と第4日曜日 午前7時30分より	
5月8日	花まつり		……… 坐禅会
5月9日	第11回牡丹コンサート開催	毎月第1火曜日	………… 婦人読経会
6月8日	大般若法会	毎月第1火曜日 午後1時30分より	… 写経の会
8月13日～16日	盂蘭盆会	毎月第2と第4水曜日	………… ご詠歌教室
9月20日～26日	秋彼岸会	随时拝観、法話、坐禅研修会を開催しております。	

大雄寺ホームページ 詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載

URL:<http://www.daiouji.or.jp/> E-mail:ryoyu@daiouji.or.jp